

SCARTS ラーニングプログラム

西2丁目地下歩道映像制作プロジェクト

空族 台湾先遣隊調査報告

《ILHA FORMOSA》

特別上映&アーティストトーク

2023年6月10日(土) 17:00~18:30

本稿は2023年6月10日に行われたトークイベント内容をダイジェスト版として編集したものです。

---

## 目次

- ・空族が見た台湾を切り取る—檳榔・ダン君・原住民、情報過多のワケ
- ・台湾で新作長編を構想—憧れの先、もっと深いレイヤーへ
- ・音楽を掘って、その土地を知る—原住民音楽から見る台湾の「今」
- ・映画化で汲み取り切れないものをインスタレーション作品に
- ・映画配信時代に「ささやかな抵抗」—未ソフト化のジレンマと喜び

## 空族が見た台湾を切り取る—檳榔・ダン君・原住民、情報過多のワケ



樋泉綾子(以下・樋泉)：西2丁目地下歩道映像制作プロジェクト、映像制作集団・空族(くぞく)台湾先遣隊調査報告《ILHA FORMOSA(イラ・フォルモサ)》アーティストトークを始めます。私は札幌文化芸術交流センターSCARTSの樋泉と申します。今回の特別上映とトークは、SCARTSが主催する西2丁目地下歩道映像制作プロジェクトの一環として行うものです。



樋泉：SCARTSでは、さっぽろ地下街オーロラタウンと、SCARTSが入るこの札幌市民交流プラザをつなぐ「西2丁目地下歩道」を舞台に映像制作プロジェクトに取り組んでおり、毎年1~2組の作家に依頼し、4面プロジェクションで構成された「横長の特殊スクリーン」と「歩行空間」という特性を生かした作品の制作と上映を2019年から行ってきました。今回、空族の皆さんに制作いただいた《ILHA FORMOSA》はプロジェクト6作品目。台湾取材した空族の最新作で、これまで映画館などでの上映に限って発表されてきた空族作品としては初となる公共空間での常設作品です。

地下歩道では毎日朝9時から夜9時までの12時間、4月に発表された本作を含む6作品全てを上映しています。今回は空族の作品完成を記念し、SCARTSコートの特設スクリーンで、じっくり何度でも、好きなだけ《ILHA FORMOSA》をご堪能いただける5日間の特別上映を企画しました。さらに本日は、空族の富田克也監督はじめ制作チームの皆さんにお越しいただいています。まずは作品をご覧ください。



樋泉：いかがでしょうか(会場拍手)。ここからは映像・映画分野のキュレーターとしてご活躍され、2021年からこの映像制作プロジェクトの作家選定・作品制作に携わっていただいている杉原永純さんに進行をお願いします。

杉原永純(以下・杉原)：キュレーターの杉原です。今日をご来場いただきましてありがとうございます。早速で

すが、ご登壇いただいたみなさんに《ILHA FORMOSA》制作における役割を伺います。まずは富田さん、お願いします。

富田克也(以下・富田)：こんにちは、富田克也です。本日はご来場いただき、本当にありがとうございます。「空」の「族」と書いて「くぞく」と申します。普段は映画を作っています。《ILHA FORMOSA》では演出を担当しました。よろしくお願いします。



相澤虎之助(以下、相澤)：相澤です。いつもは脚本を一緒にやっているんですけど、今回は構成などその他もろもろやりました。よろしくお願いします。

古屋卓磨(以下、古屋)：古屋卓磨と申します。芸名では「Mr. 麿」と呼ばれています。「スタジオ石」のメンバーとしてミュージックビデオを作ったりしていて、空族の作品では撮影や編集、仕上げなど映像制作の全般に携わっています。

田中隆ノ介(以下、田中)：こんにちは、田中隆ノ介です。現地での運転やりサーチを担当しました。よろしくお願いします。



杉原：事前に募集した質問にも触れつつ、制作過程や意図についてお話しいただきます。まず、最も質問が多かったのが、「なぜ台湾で制作し、SCARTSで発表することになったのか?」。空族と台湾とは、どの辺りが出発点なのでしょう。

富田：はい。本当にたくさん理由があり、それらがつながっていった結果、こうなっているという感じなので、どこから話せばよいのか悩むのですが…。まず僕らの大前提として、映画制作者であり、映画好きな人間であるということがあります。1980～90年代に「台湾ニューウェーブ<sup>\*1</sup>」というムーブメントが起こり、楊徳昌(エドワード・ヤン)や侯孝賢(ホウ・シャオシェン)といった作家の映画を観て、「台湾」という地名に憧れを抱いていたというのがひとつ。そして、空族として映画を作り始め、『バンコクナイツ<sup>\*2</sup>』という作品などを制作する中で、アジアを巡るようになりました。「アジアの中にある日本」「日本を含めたアジア」を見つめ直すようになっていったんです。

杉原：私が最初に富田監督からいただいた企画書で触れられていたのは、ダンさんとヨグさんのことでした。

富田：そうですね。僕たち空族が2007年に制作した『国道20号線<sup>\*3</sup>』という作品を台湾の高雄(たかお)映画祭に呼んでいただいた時、通訳となってくれたのが、台湾人のダン君でした。映画祭期間中に仲良くなり、「僕の地元行きましょうよ!」と誘われて行った先が、台南(タイナン)という都市。そこでダン君に紹介してもらった人達が縁になって、今回この作品の中にもたくさん映っています。僕たちはそうやって、人間関係が先にありきで、人のつながりから興味を持ち、そこに赴いて、だんだん広がっていった作品になる、という映画の作り方をしています。



富田：ダン君と最初に会った時、檳榔(ピンロウ)<sup>\*4</sup>…って、知らない方が多いでしょうか。くちゃくちゃって

口の中で唾液と混ぜて、真っ赤っ赤になる、覚醒作用がある木の実なんです。長距離トラックの運転手さんがよく食べていて、みんな中毒です(笑)。ダン君も檳榔が好きで、赤い唾液をブチューって道に吐いて、「最近の若いヤツらは汚いとか言って食わないんですよ!」と、やたら反抗的な人だったんですが(笑)、それで仲良くなりました。

確かに台湾の道を見ると、真っ赤っ赤。僕らも「なんだなんだ、それは。食べてみたい!」と興味を引かれ、僕も虎ちゃんも食べました。最初は分からないから、唾液も飲み込んだ。[駄目だ、飲み込んだ!]と言われたときには喉が締まってきちゃって「うおー、やばい!」みたいなこともあったりして(笑)。

古屋：1回目は飲み込んだじゃいけないんだよね。

富田：そう、そう。そこから僕らも檳榔中毒になり(笑)。台湾に行く时必须買いました。今回の作品は「僕たち空族が見た台湾」というかたちだったので、僕らの目で台湾を切り取ると、まず、檳榔が最初にくるんです(笑)。



相澤：檳榔は、台湾に限らず東南アジアに広がっている、ひとつの独特な文化といえます。ヤシ科の植物で、南国の風景を僕たちは映画の中でも見てきたので、ノスタルジックな気持ちを抱いたりして。今回、檳榔を作っている方の話も初めて聞いて面白かったですね。

富田：檳榔だけは、絶対撮りにいこうと決めて。

古屋：初日から撮影しましたよね。

富田：台湾に着くなり、いきなり店に行ってカメラを仕込んで。檳榔を仕込んでいる場面が撮れるなんて、もう、俺たちにとっては最高!

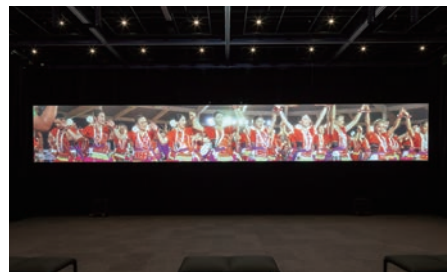


相澤：職人技ですごかった。

富田：檳榔は、台湾で2兆円規模の大きな市場らしいです。ただ、檳榔の木ばかり植えるものですから、環境問題も起きて反対派もいるらしく。でも、本当に台湾の人、みんな大好きなんです! ニヤって笑うと分かるんですよ。口中真っ赤で、歯が溶けてポロポロ、目がギンギン(笑)。

相澤：檳榔は、作品にも出てくる原住民の方々の儀式にも使われます。

杉原：《ILHA FORMOSA》の最後に出てくるアミ族の儀式「豊年祭」でも、檳榔の実を女の人が意中の男の人に渡し、受け取ったらカップルが成立するということでした。…たぶん、1回見ただけでは全く把握できない情報量だと思うんですけど。私も、何回見ても、見るたびに新しい発見があります。



富田：確かに、いきなりあの圧倒的な情報量を見せられても、4面もあるし、皆さん「どこの画面見たらいいんだ?」と戸惑われるかもしれませんが。でも、実は僕ら、お話をいただいた最初の頃から、情報過多にしようと考えていました。というのも、皆さんが通勤・通学で朝夕行き交う道すがらに目にするという前提を聞きまして。実際に僕も地下歩道を歩きましたが、十数秒で通り過ぎる距離感なんですね。ですから、たとえば、朝通った方がチ

ラリと目にし、帰りにまた違う場面が目に入り、それを繰り返すうちに気になって、最終的にその人を立ち止まらせてみせる!ということを狙いました。QRコードを画面に入れたりしたのも、拾ってほしいから。すると、さらに情報が広がって、その奥のレイヤーに入れる、という作りです。なので前を通るたび「今日はこちら狙うぞ」「よし、今日はこのQRコード拾った!」みたいな感じで、全部コンプリートしてほしいと思っています(笑)。

杉原：先ほど地下歩道で見た時に、編集の磨さんもQRを拾おうとされましたね。



古屋：台湾のゴミ収集車のタラララという特徴的な音、俺が好きなバンドのアルバム1曲目みたいな曲があって、それを拾いたいと思ってQRコードにかざしたんですけど…全然拾えない(笑)。

富田：それ、失敗してるじゃない(笑)。

古屋：ほかは取れましたよ。なのでみなさん、しつこく待ち伏せてください。

- ※1 従来の商業映画とは一線を画し、台湾社会を深く掘り下げた作品群を生み出そうとした若手監督らによる運動。
- ※2 バンコクの歓楽街で働くタイ人娼婦と日本人の男たちが織り成す2016年のロードムービー。
- ※3 国道沿いの地方都市で暮らす元暴走族の青年と、彼の日常を活写したインディーズ映画。
- ※4 噛みタバコに似た一種の嗜好品。

## 台湾で新作長編を構想—憧れの先、もっと深いレイヤーへ



杉原：来場者の皆さんの中で、台湾に行かれたことある方はいらっしゃいますか?(5、6人挙手)台北(タイペイ)以外にも行かれた方は?(1人挙手)

富田：僕たちも台湾に行った当初は、台北を中心に台湾を見ていたんです。けれど映画を撮るためにウロウロし始めると、中華系の方々だけの国ではないことにすぐ気づき、原住民の存在を知ることになりました。そしてある時、台湾の映画プロデューサーから「一緒に映画を作らないか」と声を掛けていただきました。僕たちは台湾の映画監督に憧れがあるものですから、「ぜひとも!」とプロジェクトをスタートさせたんです。



富田：《ILHA FORMOSA》でも触れましたが、台湾には「本省人・外省人<sup>※5</sup>」という区別がありまして、彼らの存在は台湾ニューウェーブの監督たちの映画の中でも描かれていました。でも、原住民の姿は見ていない。僕たちが台湾で映画を撮るなら、さらに深いそのレイヤーまでたどり着いて描こう、というのが僕たちの思いでした。この作品も、そういう流れの中で原住民の方たちにコンタクトしていったんです。今回はアミ族、セデック族、ルカイ族、パイワン族と4部族の方々が出てきましたけど、本当はもっといます。

古屋：現在16部族ですね。わりと近年になっても、言葉が違ったりすると原住民部族認定されるケースもあり、2000年代に入ってから増えています。

相澤：だから台湾は、ある意味ものすごい多民族国家というのが、僕たちの新しい認識です。

富田：よその国が良く見えちゃうという面を差っ引いても、今の台湾は、すごくちゃんとしている人達が多いような気がします。政治的に大変な中、常に自分達の状況を考えなきゃいけないからかもしれませんが、話のレベルも高い。少し寄らせてもらったある家で、いきなり本棚から「老荘思想」の書物を開いて、宇宙空間みたいなものが描かれているページを開きながら、家族で深い話をしてる!みたいな。今の蔡(サイ)政権では、2019年から同性婚が認められてもいますし。

作品の後半に花蓮(ファーレン)という地域の夜市が出てきます。気づかれた方もいるかもしれませんが、そこで踊っている方々はトランスジェンダーの人々が多くて、そういうことへの意識も非常に高い。さらに言うと、もちろん時代によってさまざまな問題はあったと思うんですけど、今は原住民に対しても意識が上がり、原住民の言葉を教科書で教えて残そう、などの政治的な動きもあります。かつて日本が侵略した時は全部日本語にしておもうとした歴史があったんですけど。

※5 本省人は第2次世界大戦前から台湾に住んでいる人たち、外省人は戦後、中国大陸から台湾に移住した人々の呼称。

## 音楽を掘って、その土地を知る—原住民音楽から見る台湾の「今」

相澤：僕たち音楽が好きで、《ILHA FORMOSA》にもミュージシャンの方々に出させていただきましたけれど、音楽の面では顕著に、新しい波がきています。台湾原住民の作る音楽が現代のダンスミュージックとかポップミュージックとかと結びついて、すごく面白い。

杉原：台湾の音楽は、どうやって掘っていったんですか？

富田：僕たちの映画の撮り方として、知らない土地を知るのに一番手っ取り早いのが、現地の音楽を掘ることだと、ある時掴みまして。だから彼(=古屋)、なぜ「Mr. 麩」なんて名前を持っているのかといえば、山梨のヒップホッ

ブ・グループ「stillichimiya(スティルイチミヤ)」の一員で、音楽をやりながら空族を…というか、地元の先輩・後輩と一緒に映画を作ってるという話なんです。仲間にDJがいるので、レコード掘りの利がある。現地に入り込んだら、あっという間に、音楽の深いところまで到達しちゃうんですね。今日は来れなかった仲間の一人に、この作品の音声を担当したstillichimiyaのメンバー・YOUNG-G(ヤング・ジー)もいて。彼も、俺たちが行く前から台湾の音楽を掘ってくれていたんです。あと田中、彼も僕らの山梨の後輩なんですけど、ある時ワーホリだった？

田中：ワーキングホリデーで1年滞在した経験があります。

富田：そもそも「ワーホリでどこか行こうと思うんですけど、どうしたらいいですかね？」と聞かれたので、「俺たちそのうち台湾で映画撮るから先に行っといてくれよ!」という流れです。

田中：台湾南部の嘉義(カギ)市に住んだり、台北にもいたりして、作品のリサーチなどをやりながら、半年ぐらい生活しました。



相澤：言葉が喋れたので、すごく助けられました。

古屋：車を運転しつつ、通訳もしつつみたい。

富田：彼が現地でつながっておいてくれたヒップポップのクルーに会ったりして、音楽の人脈を広げました。そうした中で、僕たちが今回会いに行く一番中心にすえていたのが、ヨグ・ワリスさんというセデック族出身の女性アーティスト。セデック族のパートで、ミュージックビデオの一部を使わせていただいた方です。猪を追いかけるアニメーション。あれは結構、台湾国内でも物議をかもしたそうですが、僕たちも見ていたものですから。ちなみに十数年前、『セデック・パレ<sup>※6</sup>』という映画が公開されたんですが、これは旧日本軍が台湾を支配していた時代にセデック族が起こした抗日活動「霧社(ムシャ)事件」を基にした物語。セデック族と日本は、そうした因縁もあるものですから、「ぜひ会いたい!」と思っていました。オファーを出したところ、彼女は受け入れてくれたんですが、やはりちょっと周りからのプレッシャーなどがあり…結局、会うことは叶わなかったんです。勝手に彼女の村まで押しかけて、地元の子供に話を聞いたりしましたが(笑)。やはり僕ら日本人が台湾に行くとなると、ピリッとする瞬間もありました。



相澤：僕たちとは色々な意味で縁の深い国だし、これからも縁が深くなる国だと思います。

杉原：『セデック・バレ』について補足すると、監督のウェイ・ダーションさんは、台湾ニューウェーブより少し後の世代。2008年にヒットした『海角七号 君想う、国境の南』は、台湾南部の街を舞台に、日本の占領期を踏まえたラブストーリーでした。その後に行った『セデック・バレ』は、内容的には真逆に見えるんですが、作り手の意識も変わってきて、ニューウェーブとは違う受け止められ方をしたんです。少数民族の言葉で話す映画が台湾国内でもヒットするようになったということは、台湾の意識が随分変わってきた証といえます。

相澤：台湾の日本統治時代、日本は原住民を「高砂族(たかざとく)」と総称していたんですけど、彼らは太平洋戦争中、日本軍の兵士などとして戦い、にも関わらず顧みられなかったという歴史があります。セデック族の霧社事件も大規模な反乱でしたが、その後日本軍がセデック族の親日派を使って虐殺するなど、むごたらしいことを行っていて…セデック族の土地に行き、「歴史は歴史。これから先を見よう」とおっしゃる方もいましたが、やっぱり警戒心がある方もいるらしく。彼らが住む場所は、標高3000m超の山が連なるすごい山岳地帯でしたね。



※6 日本統治時代の1930年、セデック族が住む「霧社」で起きた抗日暴動・霧社事件を描いた2011年の台湾映画。

## 映画化で汲み取り切れないものをインスタレーション作品に



相澤：《ILHA FORMOSA》の前半には、中国の秘密結社「洪門(ホンメン)」が出てきます。事務所は保養所みたいな雰囲気ですけど。



杉原：今どんな活動をしているんですか？映像ではずっと麻雀してますね(笑)。

富田：おそらく、ことが起こると動き出す方々だと思うんですね。大きな何か、歴史が動きそうな時に動き出す人たち。

相澤：そうですね。中国に「水滸伝(すいこでん)」という小説が伝わるように、人の上に立つ人間がひどい暴君だった場合、民衆が反乱して新しい世の中を作る。「義のために立つ」という思想のもとに集まっているようです。

富田：一説によると、洪門は辛亥革命の機運の高まりなどでも暗躍したそうです。

相澤：西洋のレボリューションとは違う、アジアならではの世界観かもしれません。タイなどほかの国でも感じるので、おそらく日本にも、そういうものが連綿と受け継がれているのではないのでしょうか。



富田：情報量が多すぎるので気づかれなかったかもしれませんが、映像の中には「正気(せいぎ)の歌<sup>\*7</sup>」というのも流れます。

相澤：南宋の政治家・文天祥(ブンテンショウ)という方の詩ですね。

古屋：「正気の歌」は時代ごとに生まれてるらしいですよ。

相澤：日本では幕末、吉田松陰や藤田東湖も独自の解釈で詠んだんですけど、その元ですね。



富田：僕ら日本人も身近な「漢字」に込められた深い部分を、まざまざと見せつけられることも多かった。「天」「元」「无(無)」「仁」という字を画面に出したのも、これら漢字の持つ要素は全部同じで、中国では「人間」を“二”という字の組み合わせで表したことを知ったから。「漢字って思想なんだな」と思ったのが背景にあります。

富田：「義を以て」という動きは常に社会と並走っていて、あまりにも人間が腐敗するとそういうものが立ち上がって世直しの動きになっていく。そんな歴史を知ると、台湾の人達がピツとしているなあ、という印象もうなずけます。今の日本社会を見てると恥ずかしくなるっていうか…。「すげえな、この国」という思いを、このインスタレーションにも込めてみました。こうした思想は自然を背景にしている、原住民の人々はそこを根源とされている。そうした人たちがひとつの島にいることを「共和制」と呼ぶんだらうなと思います。もちろん問題もまだまだたくさんあると思うんですけど、少なくとも、僕たちが今見つめている台湾は「いいな、すごいな」というのが実感です。

杉原：私は空族と仕事を続けてきて、映画になった時には汲み取りきれないたくさんのもとりサーチで出合うという話を聞いていたので、それを一度作品化してみましようと思案しました。実際、4面構成にしてどうでしたか？編集はすごく大変だったんじゃないでしょうか。

古屋：1か月間撮影を行ったのですが、撮りためたものを「自然」「原住民」などのテーマ別に並べようとした時に、時系列で動いていない分バラバラで確かに大変でした。良かったのは、台湾の若い人たちが海辺で開催して

いた音楽フェスに行った時、会場で空族の『典座 -TENZO-<sup>※7</sup>』という作品を上映してくれたのですが、同時に開催された映像コンペに急ぎょ我々も参加することになり、旅の前半ぐらいまでの撮影内容を編集したんです。半月分の映像を総ざらい見直し、1回編集をかけたので、素材がわりと頭の中にあり、その後は「撮っていないものを撮ろう」みたいな考え方ができました。編集は突貫作業だったので結構大変でしたが。

富田：「コンペに参加したら、フェスにいる間中ご飯が無料になるよ」という誘い文句に目がくらんで引き受けたら、すげー大変な目に遭いまして(笑)。結局ゲストハウスにこもりきりで、1回もフェスでご飯を食べる暇がなかった(笑)。



古屋：映像はまだYouTubeにあるので、よければ見てください。「空族會台灣」と検索すればヒットします。《ILHA FORMOSA》は情報量が多くて4面もあるから見るのが大変ですけど、こちらは1画面です。

相澤：画面の端っこの方に撮影道具・カチンコのイメージで場所の説明を入れたのは、色々な場所に行き過ぎたためでもあります。

富田：映像のインスタレーションという、もうちょっとアーティストチックになるんでしょうけれど、僕はこれから作る映画のためのリサーチ報告という体だったので、アートの感覚を一切排し、情報を徹底的に詰め込んでいきました。

古屋：「アートっぽくするのはやめちゃあ!」って、編集集中に言いましたよね(笑)。

※7 宋末、元軍に捕らえられた文天祥が獄中で作った五言の古詩。

※8 福島と山梨に生きる2人の若い僧侶の苦悩を軸に、3.11以降の仏教の意義を紐解く2019年の仏教映画。

## 映画配信時代に「ささやかな抵抗」—未ソフト化のジレンマと喜び

杉原：ご質問を受けたいのですが、いかがでしょう。

質問者1：貴重なお話、ありがとうございます。以前から新作映画を準備しているという情報を見受けていたのですが、台湾の映画はそれとは別の企画なのでしょうか？

富田：ありがとうございます。そんなふうに僕たちのこと知っていただいでるだけで嬉しいです。はい、2つ同時に進めています。僕たち1個ずつやると、10年に1本ぐらいしか撮れないので(笑)。経験も積みまし、せめて2本ぐらい同時にやっとな方がいと。1本は台湾で撮ろうと思っている長編、もう1本は、地元・山梨を舞台にした映画を考えてます。

質問者1：内容はさておき、台湾の取材が山梨を舞台にした作品にフィードバックされることは？

富田：あると思います。結局、そういう風になっていくんだと思います。



古屋：そうなんですか!?

富田：今までだって、そうだったじゃん。ちなみに、台湾で作る長編は5年以内に完成させるという契約です。すると、山梨の作品は、もう少し後になるのかなと。だから台湾の長編に出ていただいた方が、流れ流れて、日本で撮る作品に出てもらうことになるのは、大いにあり得えます。

質問者1：空族の作品がたくさん観れそうで、すごく楽しみです。ありがとうございます。

杉原：事前に受けた質問を、僕から聞きます。「これまで空族は約20年間自主配給を続けられ、今どのように映画シーンが変化してきたか。自主配給と地域上映の課題と未来についてお伺いできたら幸いです」。札幌、北海道で映画の制作や宣伝・配給をされている方からのご質問です。

空族の制作スタイルは特殊でして、通常、映画は作った後、別の方の手に渡って公開・配信などが行われるんですけど、空族の場合は、劇場に届けるまで自分たちでやっています。すると何が起るか。上映が終わるまで次の制作ができないんです。だから本数が減っていく。そういった自主配給についてのご質問です。

富田：これは本当に、深刻な問題なんです。僕らは「空族」と名乗って20年ぐらい映画を作ってきましたけど、自分たちの作品を一切ソフト化してこなかった。これは、僕らの作品を上映してくれる小規模映画館・ミニシアターさんが、厳しい状況にあるから。もう随分前から言われていることですが、動員が厳しい。どんどん客が減っているんですね。確かに、映画を公開してもレンタルビデオですぐ並んじやったら映画館に行かないなと思っていたら、配信も加わって…。だから、ささやかな抵抗だと思って、僕たちは自分たちの作品をソフト化してこなかったんです。劇場で観てほしいから。とはいえ、空族がやっているだけでは、「ささやか」どころか何の足しにもならない(笑)。

僕らもいい解決策は思いつかないんです。ジレンマもあるんですよ。たとえば、地方の方から問い合わせをいただいても、「すみません、見れないんです」と答えるしかない。ソフト化したり、配信すれば早いとは思うんですけど。



富田：こういうかたちでやってきて良かったなと思うのは、地元の有志の方々が自主上映会を開いてくれること。僕たちは喜んで出て行って、30~40人のお客さんたちの前で話す、という活動をずっと続けてきました。すると、その土地に人のつながりができる。対面して話ができるのが、一番良かったことだと思います。

でも、皆さんがこれをやればいいとは言えないし、「どうしたらいい?」と言われても、「僕たちはこうやってきました。それが僕たちの喜びになっているので」と答えるしかできません。逆にいうと、20年やってきましたが、僕たちを知らない方々の方が圧倒的多数なんです。札幌でこんなにたくさんの方々に来ていただいていることが不思議(笑)。「なぜ来たの?」と聞いてみたいくらいです。

…空族のことを知っていた方はいらっしゃるんですか?(会場の半数ほど挙手)あ、そうですか。それでは、このインスタレーションを見て来た方は?(4、5人挙手)あ、すごい。嬉しいです。良かったです。このお話をいただいたSCARTSさんにも、この場をお借りして感謝申し上げます。

ミニシアター文化は世界でも貴重なんですね。フランスなどと並ぶ、日本はレアな国。ここ札幌にも、ずっと頑張ってくださっているシアターキノさんがあります。昨日は『典座-TENZO-』を上映していただいたのですが…みなさん、シアターキノさんに映画を観に行ってください! もう、それしか方法はないと思います。本当に、映画館に行ってください。

杉原：《ILHA FORMOSA》がどう見えているのかも伺いたいですね。感想でも結構です。

質問者2：4面を見て、「これ、どういう状況なんだろうな」と思う場面がありました。いいところで切り替わっちゃうので。たとえば、1番左の画面にあった「何も語ろうとしないおじさん」(笑)。エピソードがあれば聞かせていただきたいです。あと、これから台湾で撮られるものはドキュメンタリーではなくて、フィクションなんですか?

富田：ありがとうございます。フィクションです。あくまでフィクションなんですけど、僕らの作り方として、実際に起きたエピソードなどを下敷きにしつつのフィクションになると思います。それで、ご質問いただいた「何も語ろうとしないおじさん」。あの場こそが、秘密結社・洪門(ホンメン)の事務所なんです。僕たちは洪門の秘密を聞き出そうとして一生懸命質問しました。「今洪門はどういう活動をしているんですか?」とか。でも、のりくらりとかわされて(笑)。

古屋：のれんに腕押しなんですよね。

富田：最終的に、何も語ってもらえなかったなと思っていたら、(相澤さんを指して)この人が「ああ、みんなで協力し合ってあれするということなんです」って勝手にまとめた(笑)。

相澤：ちょうど飾ってあった三国志の「桃園の誓い」、劉備・関羽・張飛の3人が義兄弟になる誓いを結ぶ名場面なのですが、それを指さして「そういうことですね〜」みたいな(会場笑い)。



富田：(笑)必ず飾ってある洪門の象徴なんですけど、それを指さしても「……」。それで、ここのキャプションは「何も語ろうとしないおじさん」にしておきました。

田中：あの事務所は、台北の新北(シンペイ)市のマンマー街にあります。誰でも入れる事務所なんです。

富田：語ってくれない理由がね、秘密をひた隠しにしているのか、おじさんももうよくわからなくて麻雀を打つだけになっているのか、僕らには判断つきかねていて(笑)。ほら、あるじゃないですか、日本でも。外国人に「これ、何ですか?」って聞かれても、日常に埋没すぎてよくわかんねえな、みたいな。あの場ではさすがにそれ以上

聞けなくて、勝手にまとめました。

質問者3：とても面白かったです。聞きたかったのは、ピリッとした瞬間はほかにもあったのかということ。あと、途中で映る「OMK新聞」についてお聞かせください。

相澤：ピリッとした瞬間…さっきも触れましたが、セデック族の中にも親日と反日があって、親日の方たちの話で「あっちの部落は日本人の方は行かない方が」という忠告はありましたね。

古屋：旅で知り合ったセデック族のDJ・ラヴさんは、わりと親日のスタンスの方でした。

富田：全般的に台湾は親日の国なので、どこに行っても親切にしてもらいました。そして、「OMK(ワンメコン)新聞」。これはですね、僕らが『バンコクナイツ』という作品を作った時、ロケ地となったタイの音楽を掘るため、全面協力いただいた「Soi48」という2人組がおりまして。彼らやYOUNG-Gと一緒によく調べていくと、ラオスやカンボジア、タイなどメコン川流域の国々の音楽はつながっていることが分かったんです。アジアの音楽はどこかでつながっている、「メコン」とは「メコン川」のことで、「OMK」というDJグループが結成され、活動の一環で作ったのが「OMK新聞」です。アジア地図をどんと載せて、各地のアーティスト情報をQRコードで紹介しました。このインスタレーションにQRコードを入れたのも、OMK新聞のアイデア。台湾のミュージシャンに渡して、「おお!」と感心してもらったショットが《ILHA FORMOSA》にも出てきます(笑)。調べたら買えます。面白いと思います。

質問者3：ありがとうございます!

富田：よかったら、OMK DJズを札幌に呼んでやるぜ、みたいなイベント企画もお待ちしております!(笑)

質問者4：「アジアの中の日本」という言葉が印象的でした。先ほど「日常に埋没して分からない」という発言もありましたが、今回インスタレーションを作るために1カ月間、台湾部族の生活に深く分け入った中で、日本のことで気づいたこと、普段意識しない台湾の風習と比較して分かったことがあれば教えてください。

富田：ありがとうございます。たくさんあるんですけど、たとえば、神社に飾られてるあの白い紙の飾りや鈴。台湾から戻って、あの白い紙は稲妻、その後に鳴らすガラガラは雷の音を模している。つまり、あれは五穀豊穡なのだと思いました。稲妻が落ちると大気中に大量の窒素が発生し、農作物に良い影響を及ぼして育つ。科学的根拠を知る以前から、人間はああいうものを作っていたんですね。だから台湾の原住民の方々が大切にされている儀式のようなものが、日本にもあるのだと改めて認識しました。

杉原：最後にそれぞれ一言ずつどうぞ。

相澤：さっきのご質問の補足ですが、私の場合は七福神。台湾から帰ってきて、見る目が変わりましたね。台湾にも全く同じような神様がいるんです。七福神を見ると、大陸とつながっているな、と感じます。

杉原：(富田監督の「ああ、しまった!」という表情を見て)どうぞどうぞ。



富田：北海道なのでこれを言わねばと思っていたことがありました。アイヌの皆さんとも、つながっているんです! 衣装や道具など、台湾の原住民の方々との結びつきを感じました。細工の精密さはアイヌが圧倒的にすごい。先日展示品を見てぶっ飛びました。

古屋：僕は普段、ヒップホップの現場にいることが多いんですけど、わりと男性社会の雰囲気。でも台湾の現場は、トランスジェンダーの方が多い。踊りが盛んだからというのもあるかもしれませんが、ほかの国にはない現象で、面白いなと感じました。

あと、この先遣隊は2回目です。1回目を2020年初頭に行ったのですが、その時パイワン族のアーティスト・阿爆(アーバオ)さんにインタビューしたんです。翌年、彼女は台湾のグラミー賞みたいなもの選ばれ、原住民の音楽を紹介するレーベルを立ち上げるなど、どんどん活動が大きくなり、原住民族の音楽が見直され、より発展していく流れを体感できました。

富田：この3年の間にアーバオさんは大スターになりすぎて、今回会いに行けませんでしたね。

田中：色々あるんですが、人がエネルギッシュ。人がすごく…何ていうのかな、内面も外面もあーだこーだ言える立場ではないのですが(一同爆笑)、日々勉強でした。勉強になった人達です。すごい進みます、台湾は。日本は先進国と言われたりしていますが、台湾こそ先進国だと思います。

杉原：札幌で新作を撮る構想はありますか？

富田：やりたいです。いっぱいやりたいんですけど、どうもゆっくりしちゃって。でも分かりませんよ、何がどうなるのか。これをきっかけに、やりたいです!ただ、これ(お金のしぐさ)が…(会場笑い)。本当に僕たち大変でね。「今2本抱えてます」って、言ってるだけですから(笑)。でも、あと何本映画撮れるかなという年齢になってきたので、少しでも急いでやりたいんです。頑張ります!

樋泉：富田さん、相澤さん、古屋さん、田中さん、そして杉原さん、ありがとうございました!これでアーティストトークを終了します。お時間の許す方はぜひもう一度ご覧ください。

文：新目七恵／撮影：伊藤留美子



## プロフィール



### 映像制作集団・空族

富田克也、相澤虎之助らによって2003年に結成。代表作に『サウダーチ』(2011)、『バンコクナイツ』(2016)など。山梨県甲府市を舞台にした映画『サウダーチ』において、現地に実在するHIPHOPクルー "stillichimiya" の面々を主演の一角に迎えたことをきっかけに、次作『バンコクナイツ』以降、同郷の先輩後輩である両者が共作するようになる。因みに、stillichimiya 内の映像ユニットが「スタジオ石」(Mr.磨&MMM)であり本作の撮影を担当。同じくstillichimiyaのトラックメーカー Young-Gが、録音&整音を担当している。

<https://www.kuzoku.com/>



### 富田克也

1972年山梨県生まれ。2003年に発表した処女作、『雲の上』が「映画美学学校映画祭2004」にてスカラシップを獲得。これをもとに制作した『国道20号線』を2007年に発表。『サウダーチ』(2011)ではナント三大陸映画祭グランプリ、ロカルノ国際映画祭独立批評家連盟特別賞を受賞。国内では、高崎映画祭最優秀作品賞、毎日映画コンクール優秀作品賞&監督賞をW受賞。その後、フランスでも全国公開された。最新作はオムニバス作品、『チェンライの娘(『同じ星下、それぞれ夜より』)』(2012)。



### 相澤虎之助

1974年埼玉県生まれ。早稲田大学シネマ研究会を経て空族に参加。監督作、『花物語パピロン』(1997)が山形国際ドキュメンタリー映画祭にて上映。『かたびら街』(2003)は富田監督作品『雲の上』と共に7ヶ月間にわたり公開。空族結成以来、『国道20号線』(2007)、『サウダーチ』(2011)、『チェンライの娘』(2012)と、富田監督作品の共同脚本を務めている。自身監督最新作はライフワークである東南アジア三部作の第2弾、『パピロン2 THE OZAWA』(2012)。



### 古屋卓磨(Mr. 磨)

1982年生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。TVドラマのADを経て、2010年より「スタジオ石」として、MV制作を始める。2014年より、TV番組のナレーション等も始める。ラップグループ「stillichimiya」のメンバーとして音楽活動もおこなう。



### 田中隆ノ介

山梨県出身。本作品の助監督として、制作に参加。空族先遣調査隊として、現地リサーチも行っている。



### 杉原永純

1982年福井県生まれ。プロデューサー／キュレーター。東京芸術大学大学院映像研究科映画専攻修了。オーディトリウム渋谷(2011-14)番組編成担当、山口情報芸術センター[YCAM]キュレーター(2014-19)、あいちトリエンナーレ2019キュレーターとして映画上映プログラムを担当。並行して『ワイルドツアー』(三宅唱監督/2018)などの映画作品のプロデュースのほか、「潜行一千里」(2016/空族+スタジオ石+YCAM)、「ワールドツアー」(2018/三宅唱+YCAM)などの展示作品のキュレーションもおこなう。

※2021年度に本プロジェクトのキュレーターを務めている。